毛糸で
ドローイング
ー毛糸の線のものがたりー

笠原　彩（和歌山大学教育学部附属小学校）

題材コンセプト

絵画作品における線の魅力は、いきいきとした筆遣いや洗練されたその形によってつくり出される。だが、それらの線の魅力を基底で支えているものは、線の物質性でもある。筆と絵の具・墨では意識されにくい線の物質性。それを意識するための題材として毛糸によるドローイングを試みる。毛糸の柔らかな質感と色が生みだす線の魅力。その線の魅力を十分に生かした題材として、ここでは折り帖仕立ての絵本づくりを提案する。

1．題材について

毛糸の暖かで柔らかな材質やイメージは子どもに身近な素材である。引っ張ると緊張感のある直線を描き、弛ませると曲線を描く。くしゃっと丸めて立体感を出したり、撚りを解いて細い線を描いたり、いくつかの色の毛糸を撚りなおしたり、結んで色と色を繋いだり。このように、毛糸は多様な線を生みだす可能性をもった素材である。

毛糸から生まれた「線」の表現に「言葉＝物語」をつけることによって、制作過程で子どもたちが「線」に対する意識をより高めて表現できると考えた。折り帖仕立ての絵本にし、見開き単位で線の表現が次々に変化し、そこに物語が展開することで、毛糸の線の多様性を生みだすことができるだろう。

2．学習目標（第５学年）

(1) 毛糸の素材のよさを十分に味わい、楽しみながら線の絵本づくりに取り組む。

(2) 毛糸の特質からイメージをふくらませ、毛糸によってできるさまざまな線やかたちを考えていろいろ試す。

(3) つくりたいイメージに合うように毛糸でいろいろな線やかたちを作る工夫をしたり、できた線やかたちから、さらにイメージをふくらませて物語をつくる。

(4) 毛糸の線やかたちから言葉や物語をつくり、友だちの作品のよさについて思いを伝え合う。

3．学習の流れ・指導計画

■**第一次**：毛糸でお絵描き?

毛糸で絵本をつくることを知る。参考作品から自分の制作のイメージをふくらませる。

■**第二次**：毛糸の線の物語のはじまり、はじまり。

毛糸を **2** 色選び、**2** 本の毛糸の物語を想像しながらいろいろな線を描く。

■**第三次**：毛糸の物語をつくってみよう。

出来上がった作品を見て、ワークシートに「毛糸の線の物語」を書く。

■**第四次**：作品発表会。

完成した作品を友だちに紹介する。

4．指導のポイント・学びのフォーカス

導入では、教師の用意した参考作品を見せる。ひとつは四つ切画用紙に **2** 色の毛糸でさまざまな線や形を描いたもの。また、折り帖仕立ての絵本作品も見せて完成作品のイメージを持たせる。子どもからは「早くやってみたいなぁ。」とか「**NHK** の番組（アニメーション）みたい。」などの反応があった。

制作過程では、**2** 色の毛糸を擬人化してお話が展開していくなど、線が単純にならないように注意させた。線だけでなく、面やかたちもつくることで変

化を持たせることなども指導する必要がある。また、毛糸は工作用の接着剤で画用紙に貼り付ける。

完成した作品を見ながら物語を創作する。線づくりと物語を同時にイメージしている子どもと線づくりを純粋に楽しんだ子どもでは、物語の内容に差があるように感じた。

5．鑑賞と批評

実践を終えて、作品は以下のような4つの典型的なタイプに分かれた。

1.線を純粋に楽しむ。（即興型・熟考型）

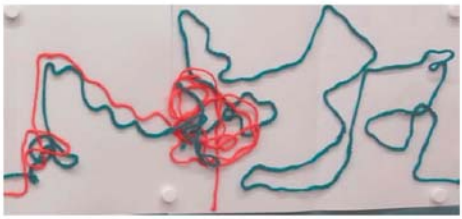
2.お絵描き・落書き調。

3.線を女性と男性に見立てる。

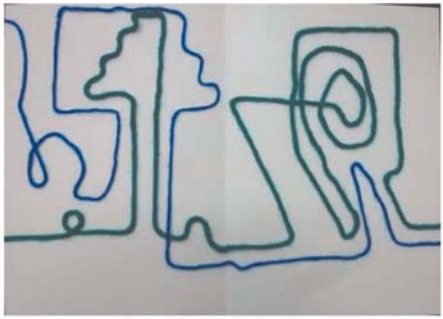
4.線と物語を同時進行で考える。

1 の即興型は毛糸そのものを味わって楽しんで取り組んだ。即興的にできる線や面やかたちを接着剤で画用紙にとどまらせようとした感じである。作品 **A** は「ぐちゃぐちゃ」というタイトルで、緑と赤の毛糸が３項目で出会い、最終項でぐちゃぐちゃの塊になっている。緑と赤の毛糸を撚って束ねている所が個性的な表現で毛糸の素材を活かせている。作品 **B** はタイトル「大ゲンカ」。毛糸をしっかりと接着剤でつけておらず、所々画用紙から浮いている。緑と赤がケンカしている箇所も **2** 色が上になり下になり、立体的な線とかたちになっているのが楽しい。

熟考型は、貼る前に鉛筆で下描きするなど時間をかけてレイアウトしている。一枚の絵として画面にメリハリをつけたり、全体のバランスを考えて配置している（作品 **C,D**）。

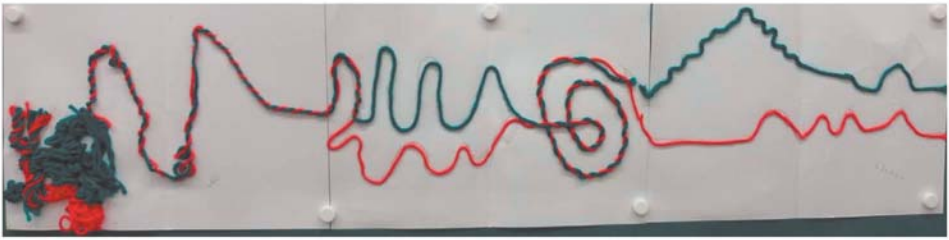


タイプ **1** 作品 **B**（部分）：和歌山大学教育学部附属小学校 **5** 年生　指導：笠原　彩,**2012**

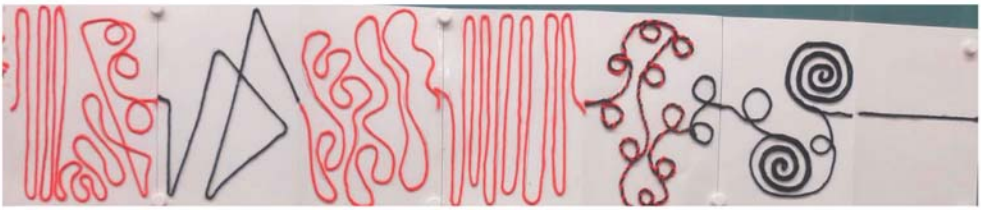


タイプ **1** 作品 **C**（部分）：和歌山大学教育学部附属小学校 **5** 年生　指導：笠原　彩,**2012**

タイプ **1** 作品 **D**（部分）：和歌山大学教育学部附属小学校 **5** 年生　指導：笠原　彩,**2012**

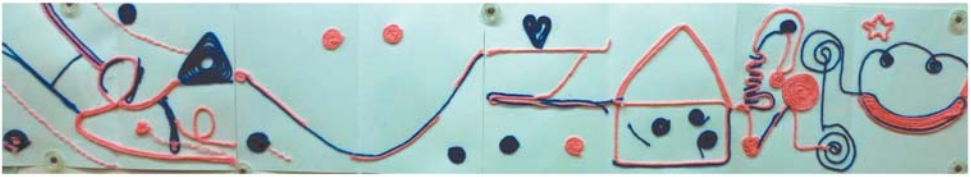


タイプ **1** 作品 **A**「ぐちゃぐちゃ」：和歌山大学教育学部附属小学校 **5** 年生　指導：笠原　彩,**2012**



タイプ 1 作品 D「グルグルギザギザ」：和歌山大学教育学部附属小学校　5 年生　指導：笠原　彩,2012

タイプ 2 作品 E「かたつむり」：和歌山大学教育学部附属小学校　5 年生　指導：笠原　彩,2012

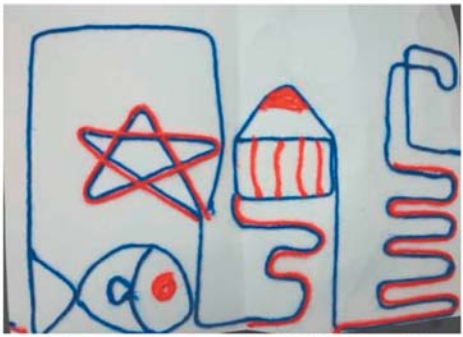


タイプ 2 作品 F「？ワールド」：和歌山大学教育学部附属小学校　5 年生　指導：笠原　彩,2012

2 のタイプも 1 のように線遊びをしているうちに形と結びつけたり思いついたりしているものである。作品Eはタイトル「かたつむり」。物語は「なんのせんでしょうか。ぐるぐるまき。まだわからない。かたつむり。どっかいった・・・」という内容である。作者の制作過程そのままを物語っているようだ。毛糸のやわらかい線が「ぐるぐるまき」や、かたつむりの歩む軌跡に見えてきたのだろう。子どもらしく、優しい作品で微笑ましい。

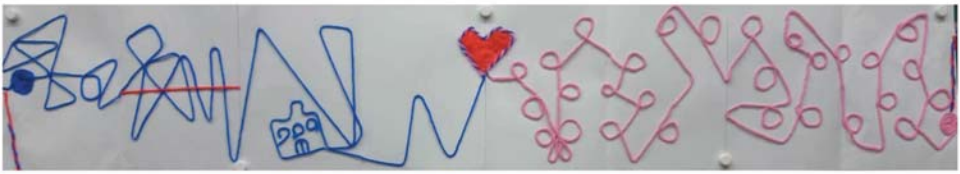
作品 F、作品 G は初めから描きたいものが決まっている。鉛筆や絵の具の代わりに毛糸で描いたような作品だ。このタイプは高学年の絵にしては稚拙な印象を受ける。毛糸という素材が細かい表現には適していないこともあるが、毛糸という素材が幼児期の感覚を呼び覚ますのかも知れない。

3 のタイプは女子に多く見られた。「出会いと別れ」などをテーマに線と色で男性性と女性性を表現している。直線は男性、曲線は女性、青や黒は男性、赤やピンクは女性等。折り帖の右端と左端

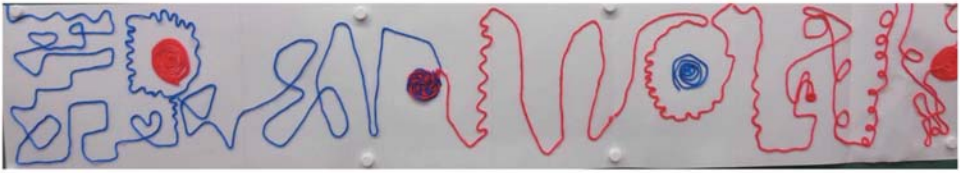


タイプ 2 作品 G（部分）和歌山大学教育学部附属小学校
5 年生　指導：笠原　彩,2012

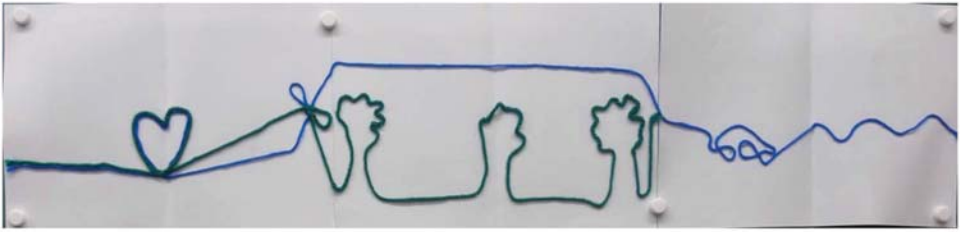
からそれぞれの毛糸が登場し、真ん中で出会ってハートの形をつくるものが多い（作品 H）。二人が出会って仲良しになって、というパターンである。線の多様性という観点からすると、線の表情は物足りない印象を受ける。作品 I も赤は曲線、青は直線を描き中央付近で 2 本を寄り合わせて円を作っている。



タイプ3 作品H「ピンクと青」：和歌山大学教育学部附属小学校　5年生　指導：笠原　彩2012



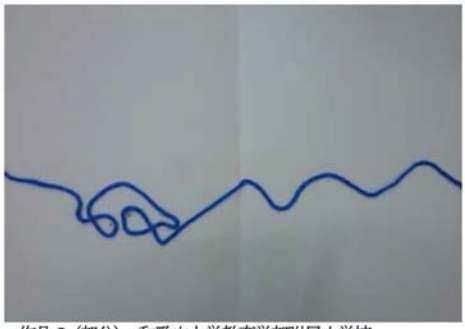
タイプ3 作品I「出会いと別れ」：和歌山大学教育学部附属小学校　5年生　指導：笠原　彩2012



タイプ4 作品J「海と緑」：和歌山大学教育学部附属小学校　5年生　指導：笠原　彩2012

作品をつくってから物語を考える子どものほうが多い中、4のタイプは少数派である。作品Jは青の毛糸で海の波や魚を描き（作品J部分）、次に緑の毛糸が樹木を形づくると、海を描いていた毛糸が空に変わる。この物語は、「ある日、海はいつものように魚たちと遊んでいました。海は空になりたいと思い、空になっていろんな場所を見ていました。すると、とってもきれいな緑の木を見つけました。あまりきれいだったので海は緑を好きになってしまいました。それから海と緑はむすばれていつまでも仲良くくらしました。」となっている。線は単純だが、海から空へつなげる部分や色で風景を分けて描いている点が他の作品とは違っている。

子どもが毛糸を指先で操作するとき、毛糸のやわらかさや暖かさ、ピンと張る感覚などを感じながら「次の線」を生みだしているように見えた。鉛筆や筆で描くように自在に線を操作できないもどかしさと、偶然生まれる線の表情が子どもの創造力に働きかけたのではないだろうか。



作品J（部分）：和歌山大学教育学部附属小学校
5年生　指導：笠原　彩2012

物語の内容については、グニャグニャ、ギザギザという線を表すオノマトペを描く子どもが多く、今後の課題であると感じた。